

令和 5 年 6 月 21 日現在

機関番号：23302

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K11064

研究課題名（和文）親になる前から始める子ども虐待の世代間伝達防止支援プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of a support programme to prevent the intergenerational transmission of child abuse starting before parenthood

研究代表者

千原 裕香（Chihara, Yuka）

石川県立看護大学・看護学部・講師

研究者番号：50738408

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：親になる前から始める子ども虐待防止支援は、全ての若者に対し親性準備性を高めるためのポピュレーションアプローチを行いながら、その中に存在する世代間伝達が危惧される者に対し世代間伝達を抑制することを目指したハイリスクアプローチを組み込むことが望ましいと考えられ、学校教育の中で実施する改良版「親子交流を通して親になることを考えるプログラム」を考案し効果検証を行った。高校生1,295名を対象に質問紙調査を実施した結果、ポピュレーションアプローチとして有効であること、被愛情感が不十分な生徒も子育てに対する不安は高まらずに自己肯定感が上昇し世代間伝達を抑制するファーストステップとなりうることが確認できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により、全ての若者に対し親性準備性を高めるためのポピュレーションアプローチを行いながら、その中に存在する世代間伝達が危惧される者に対し世代間伝達を抑制することを目指したハイリスクアプローチを組み込んだプログラムを開発でき、子ども虐待防止支援の一助となったと考える。また本プログラムは、日本の学校教育に適応したプログラム内容であり、多くの学校で応用可能であり、広く活用できる。

研究成果の概要（英文）：Child maltreatment prevention support that starts before becoming a parent should incorporate a high-risk approach aimed at reducing intergenerational transmission for those at risk of intergenerational transmission that exist among them, while taking a population approach to increasing parental readiness for all young people.

This study aimed to investigate the effects of the revised “The Think about Becoming a Parent” program for high school students. An anonymous questionnaire survey was administered to 1,295 high school students.

It was confirmed that it is effective as a populational approach. We also found that the revised program allows under-loved students to increase self-affirmation without feeling intense stress or anxiety. Therefore, it was suggested that the improved program could be the first step to suppress negative intergenerational transmission.

研究分野：生涯発達看護学

キーワード：子ども虐待予防 親になること 高校生 被愛情感 自己肯定感

1. 研究開始当初の背景

子ども虐待は、次の世代へと受け継がれ繰り返されることが指摘されており、この世代間伝達メカニズムが子ども虐待の解決を困難にしている要因の一つである。この負のスパイラルを断ち切ることが虐待予防の有効なアプローチとなる。世代間伝達の抑制要因として、自分が親になることに関する感情の質や実母との関係の受け止め方が見出されており (Milan, 2004)、妊娠期から切れ目のない心理的支援の必要性が叫ばれている。しかし「自分が親になること」について考えることは、親になってから行うのではなく、親になる前の時期から段階的に考えることが必要なのではないだろうか。そこで我々は、高校生にアプローチする「親子交流を通して親になることについて考えるプログラム」の開発を進めている。これまでの我々の研究により、本プログラムは親子関係に問題を抱える生徒(負のスパイラル予備軍)に対する効果が実施校によって異なることが明らかとなっており、どの学校においても効果的なプログラムに改良することが課題である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、プログラムの効果に学校差が生じた要因を明らかにし、親子関係に問題を抱える生徒に配慮したプログラム内容を検討し、改良版プログラムの効果を準実験デザインで明らかにすることである。

3. 研究の方法

(1)研究1

2017年度「親子交流を通して親になることを考えるプログラム」に参加した7校の高校生1,567名とそのプログラム実施者である家庭科教諭7名を対象に無記名自記式質問紙調査を行ったデータを用いて、親世代になることに対する意識尺度(千原ら, 2019)を従属変数、学校差を生む要因として推定された6側面の要因を独立変数としてステップワイズ法による重回帰分析を行った。

(2)研究2

研究1の結果をもとに、学校関係者や子育て支援者らが集まる有識者会議(プログラム検討会)で検討し改良版プログラムを作成した。

(3)研究3

改良版「親子交流を通して親になることを考える」プログラムの実施協力が得られた6つの高校でプログラムに参加した高校生1,295名を対象に、ベースライン開始時、ベースライン終了時かつ介入開始時と介入終了時の計3回の無記名自記式質問紙調査を行った。外生変数として学年、性別、家族形態、乳幼児との接触経験の程度、被愛情感を、評価指標として親世代になることに対する意識尺度(千原ら, 2019)と、サイコドラマ効果測定尺度(谷井, 2012)の下位尺度「自己肯定感」「自己の再認識」「普遍性」を調査した。また自分が「親になること」について感じたことを自由記載による回答を求めた。

4. 研究成果

(1)改良版プログラムの作成

研究1の結果、授業の構成等側面と教員個々の側面の中に、プログラムの効果に大きな影響をあたえる要因は見当たらなかった。交流の中で乳幼児の親たちからどのような話を聞いたのか等など他の要因の影響が大きいことが考えられた。研究1の結果を踏まえ、高校生は自分が親になることについて考える機会になるための交流内容(親たちからどのような話を聞くのか)に焦点を当てプログラム内容の改善を検討し、「ライフストーリーを聴く」ということに注目した。人生の先輩たちのライフストーリーを聴くという体験が若者にもたらす効果として、自分の将来について考えるきっかけになる(中川, 2010・やまだ, 2000)、自分自身の固定観念や価値観を再認識する(Lubarsky, 1987)、さらに親子関係に葛藤を抱えているような生徒にとって、同じように子ども時代に傷つき体験がある親たちの話を聞き、「悩んでいるのは自分だけではない」と普遍性に気づき安心し、解決の糸口が見え将来に希望が持てる(Sophia・Irvin, 1997)ことが示唆されている。研究者は、乳幼児の親たちのライフストーリーを聴くという体験を取り入れた改良版「親子交流を通して親になることを考える」プログラムを考案した。

(2)改良版プログラムの概要

高校の家庭科教諭がプログラム実施者となり、家庭科の授業の中で行われ、「事前授業」「交流授業」「事後授業」の3回の授業で構成された。1回の授業時間は約60分で約1か月の間で行われた。

事前授業では、交流授業に向けて子ども・子育て・親役割への関心を高めるために、生徒やク

ラスの特性に合わせた教材を用いて、子育てに関する新聞記事を読んだり、男女ペアで親になり子育て中の親の一日を考えてみる、産後うつに関するDVDの視聴など行った。また次回の交流授業で乳幼児の親たちの「ライフストーリーを聴く」ためのインタビュー内容を考えた。

交流授業では、約5~10組の乳幼児親子に高校に来てもらい、生徒約5~6名と親子1~2組で1グループとなり乳幼児親子と交流した。高校生には親たちが子どもをお世話する様子を観察し、実際に抱っこしてあやすなどの子どものお世話を体験と、複数の親たちの「ライフストーリーを聴く」体験をしてもらった。高校生が自分に引き寄せて考えることができるように、世代間ライフストーリー・インタビューを学習活動として組織するための留意点(中川, 2010)を参考に工夫した。具体的に、出産や子育てなど高校生が未経験の話だけにならないよう、子ども時代の話や親子関係の話、高校時代に子どもや子育てについてどう思っていたかについても話してもらった。また、高校生が自分のこれまでの生き方やこれからの生き方について向きあうきっかけとなるように、結婚や仕事、経済、人間関係などを含めた様々な経験についても可能な範囲で話してもらった。先行研究で家族問題に葛藤を抱える生徒も多くなっていることから、家族や保育、育ちの振り返りの作業においては配慮が必要となると示唆されている(中谷, 2016)。そのため家庭科教諭・子育て支援者から意図的に高校生に、乳幼児親子と交流する中で子どもが嫌いなどネガティブな感情も含めてどんな感情が湧いてきてもいいんだよというメッセージを伝えるよう配慮した。

事後授業では、親たちのライフストーリーを聞き、自分が「親になる」ということについてどう感じたか振り返り、インタビュー内容や感想を壁新聞風にまとめたり、クラスで共有したりした。

(3)ポピュレーションアプローチとしての改良版プログラムの効果

親世代になることに対する意識尺度(千原ら, 2019)の下位尺度「子どもとの関わりに対する意識」得点と「子どもや子育てに対する関心・感情」得点では、Pre1・Pre2間、Pre2・Post間、Pre1・Post間有意に得点が上昇し、またベースライン期より介入期の方が大きく得点上昇していたことから、改良版プログラムを通して、高校生は子どもとの関わり方を理解し、子どもや子育てに対する関心や肯定的な感情が向上していた。この効果は、従来版プログラムでも確認されており(千原・西村, 2022)、改良版プログラムにおいても同様の効果があることが確認できた。また「夫婦や社会で子育てすることに対する意識」得点は介入期に有意に得点上昇していたことが明らかとなり、高校生は改良版プログラムを通して、夫婦や社会全体で協力して子育てするという意識が向上していた。この効果は従来版プログラムでは確認できなかった効果である(千原・西村, 2022)。子ども虐待のリスク要因の一つに地域社会からの孤立が明らかになっており「孤独な子育て」が問題となっている。改良版プログラムを通して、高校生の夫婦や社会全体で協力して子育てするという意識が高まり、みんなで子育てするという意識が芽生えたことは、今の親たちそして自分たちを含む将来の親たちの孤独な子育てを回避することにつながると考えられ、子ども虐待予防支援として有効なプログラムであることが示唆された。

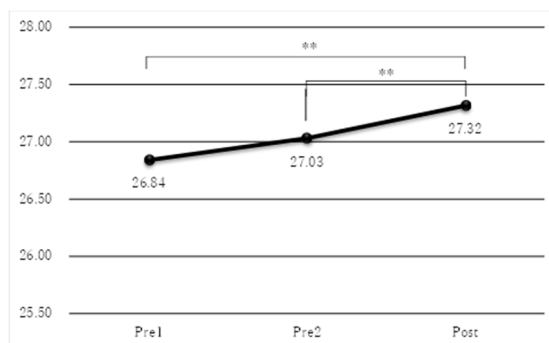


図11 「夫婦や社会で子育てすることに対する意識」得点の変化

(4)被愛情感が不十分な生徒に対するハイリスクアプローチとしての改良版プログラムの効果

被愛情感十分群と不十分群では、親世代になることに対する意識尺度とサイコドラマ効果測定尺度の各下位尺度得点とその変化パターンに違いがあるのか検討した。親世代になることに対する意識尺度(千原ら, 2019)の下位尺度「親になることに対する意識」、「親子関係に対する意識」、「子どもや子育てに対する関心・感情」、「夫婦や社会で子育てすることに対する意識」で群間に有意な差があり、被愛情感十分群に比べ不十分群の方が得点が低かった。「親子関係に対する意識」と「夫婦や社会で子育てすることに対する意識」に交互作用を認めたが効果量は小さく、親世代になることに対する意識尺度の各下位尺度得点の変化パターンに違いはなかった。

サイコドラマ効果測定尺度(谷井, 2012)の下位尺度「普遍性」において群間に有意差があり、被愛情感十分群に比べ不十分群の方が得点が低かった。「自己肯定感」「自己の再認識」「普遍性」において時間の主効果を認め、Pre1・Pre2・Postと順に得点が上昇していた。いずれにおいても交互作用はなく、両群の変化パターンに違いはなかった。以上より、改良版プログラムにより不十分群も十分群と同様に自己肯定感が上昇し、自分を再認識し、「自分だけではない」という安心感につながる普遍性を感じていた。このような変化により、世代間伝達を抑制する因子であ

る「肯定的な自己イメージが持て、自分が親になることに対してポジティブに捉えている」状態や、「自分の親との関係を受け止められている」状態に今後つながっていくことが期待できると考えられ、改良版プログラムは負の世代間伝達を抑制するファーストステップとなることが示唆された。

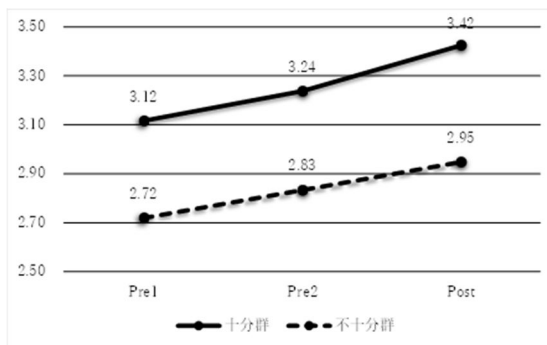


図 93 「自己肯定感」得点の変化

(5)国内外における位置づけと今後の展望

海外においては、学校教育の中で実施可能なプログラムとして、「Roots of Empathy」(Gordon, 2003)や高校生対象の「The Parenting Curriculum」(Sasso & Williams, 2002)などがあるが、それらを日本の教育に取り入れることは様々な障壁があり難しく、日本の教育カリキュラムに適應したプログラムが必要である。したがって、本研究により開発したプログラムは日本の教育カリキュラムに適應した内容であり、今後実施校の拡大が期待できると考える。

<引用文献>

- 千原裕香, 西村真実子, 成田みぎわ, 他 (2019) 青年期前期における「親世代になることに対する意識尺度」の作成と信頼性・妥当性の検討. 日本看護科学会誌, 39; 211-220.
- 千原裕香, 西村真実子 (2022) 高校生のための「親子交流を通して親になることを考えるプログラム」の効果. 小児保健研究, 81(4); 351-358.
- Gordon M. Roots of Empathy: responsive parenting, caring societies, Keio J Med 2003; 52(4): 236-243.
- Lubarsky, N. (1987) A Glance at the Past, a Glimpse of the Future. Journal of Reading, 30(6); 520-529.
- Milan, S., Lewis, J., Ethier, K. et al. (2004) The impact of physical maltreatment history on the adolescent mother-infant relationship: Mediating and moderating effects during the transition to early parenthood. Journal of Abnormal Child Psychology, 32; 249-261.
- 谷井淳一 (2012) サイコドラマ効果測定尺度の作成. カウンセリング研究, 45(2); 111-122.
- 中川恵里子 (2010) ライフストーリー・インタビューの世代間学習としての可能性. 生涯学習基盤経営研究, 34; 99-112.
- 中谷奈津子 (2016) 親性準備性にむけた「保育体験」における効果: 文献レビューからみる小・中・高家庭科教育. 大阪府立大学紀要(人文・社会科学), 64; 37-49.
- やまだようこ (2000) 人生を物語ることの意味 なぜライフストーリー研究か?. 教育心理学年報, 39; 146-161.
- Sasso TK, Williams SK. The Effectiveness of the Curriculum: An Evaluation of High school Students' Questionnaire Responses. Fam Consum Sci Res J 2002; 20(2): 1-11
- Sophia, V. & Irvin, Y. (1989) Concise guide to group psychotherapy. American Psychiatric Association Publishing, Washington DC. (川室優訳(1997)グループサイコセラピー: ヤーロムの集団精神療法の手引き, 25, 金剛出版)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 千原裕香 西村真実子	4. 巻 25
2. 論文標題 高校生のための改良版「親子交流を通して親になることを考える」プログラムの評価	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 子どもの虐待とネグレクト	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 千原裕香
2. 発表標題 乳幼児の親たちのライフストーリーを聴くという体験を取り入れた改良版「親子交流授業プログラム」の評価
3. 学会等名 日本子ども虐待防止学会第27回学術集会かながわ大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 千原裕香
2. 発表標題 親子交流授業の効果と今後の課題
3. 学会等名 日本子ども虐待防止学会第26回学術集会 いしかわ金沢大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	西村 真実子 (Nishimura Mamiko) (50135092)	石川県立看護大学・看護学部・教授 (23302)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	金谷 雅代 (東雅代) (Kanaya Masayo) (80457887)	石川県立看護大学・看護学部・講師 (23302)	
研究分担者	山田 ちづる (Yamada Chiduru) (90832915)	石川県立看護大学・看護学部・助手 (23302)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	成田 みぎわ (Narita Migiwa)		
研究協力者	山本 康人 (Yamamoto Yasuhito)		
研究協力者	寺井 孝弘 (Terai Takahiro)		
研究協力者	伊達岡 五月 (Dateoka Satsuki)		
研究協力者	村上 昌稔 (Murakami Masatoshi)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------